

■ D I (Diffusion Index) の概要

○目的

生産、雇用、消費など様々な経済活動での重要かつ景気に敏感な諸指標を選び、そのうちで上昇（拡張）している指標の割合を示すもので、景気の波及・浸透度合いや景気局面の変化を判定することを目的とした景気指標である。

○D I の作成方法

次式により、増加した系列の割合を表したものをD I とする。

※保ち合いの場合は、0.5としてカウント。

$$D I = (\text{拡張系列数} + \text{保ち合い系列数} \times 0.5) / \text{採用系列数} \times 100 [\%]$$

※拡張系列数…（増加／好転／不足）と回答した企業の数

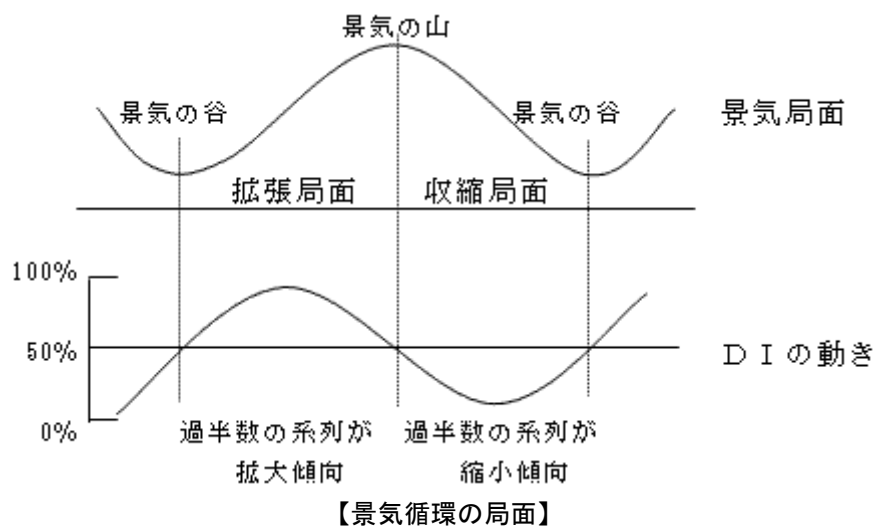
※保ち合い系列数…不変と回答した企業の数

※採用系列数…全回答企業数

○D I の見方

D I は、0～100 [%] の間で変動し、50%を上回っている期間は景気の拡張期であり、50%を下回っている期間は景気の後退期となる。

また、D I が50%ラインを上から下に切る時点が、拡張期から後退期への転換点（景気の山）となり、50%ラインを下から上に切る時点が、後退期から拡張期への転換点（景気の谷）となる。



ただし、D I の動きから景気局面を判断する場合、次のような点も考慮して判断しなければならない。

- 1 景気拡張または後退の期間が極めて短い場合は、景気の拡張・後退局面ととらえることは適当でない。
- 2 D I は、景気の各部門への波及の度合いを表すものであり、景気変動が多くの部門に波及した時が景気の転換点と考える。景気が良いか悪いかは、一応50%ラインが目安であるが、景気局面を判断するに当たっては、大半の部門に景気変動が波及していることを確認することが必要である。
- 3 D I は、景気局面の方向性を表すものである。そのため、D I の大きさ自体は景気の拡張・後退の大きさとは直接関係ない。

- 4 D I の動きには、不規則な要因の影響が考えられるため、基調的な判断は6か月程度の期間についてD I の動きを観察する必要がある。

➤要するに…

何がわかる？	留意点
景気の局面や景気転換点といった方向性 〔具体的には〕 …景気の拡張や後退という局面、波及度合い	数値から景気変動の大きさをみることはできない。 →D I は拡張している指標の割合であり、数値が高いことは、それだけ波及度合いが高くなっていることを表す。